

# 鬼の正体

——その心、うちより生ず——

吉 田 紫 織

## 一 はじめに

鬼とはなんだろうか。無論、私は「それ」を見たことはない。ないが、その存在をどこかで認めている気がする。それには恐ろしさと、滑稽さと、どこか懐かしさを感じる。『広辞苑』によると、こうだ。

- ① 天つ神に対して地上などの悪神
- ② 死者の靈魂、亡霊
- ③ 恐ろしい形をして人にたたりをする怪物。もののけ
- ④ 想像上の怪物。人身に牛の角や虎の牙を持ち、裸で、虎の皮のふんどしをしめた形をとる。
- ⑤ 鬼のような人

今、私たちが鬼と聞いて思い浮かべるものは、おそらく④であろう。この「鬼」観が生まれた様に触れつつ、鬼がもつとも跋扈したとされている中古という時代に生きた人々を考えることで、鬼の正体に迫ってみたい。

そうして、鬼は今、どこに居、どこに行こうとしているのか、思いを馳せてみた。

## 二 鬼の出現

鬼が文学、芸能で頻繁に出現するようになるのは中世だと言われている。しかし、馬場あき子氏の言葉を借りると、そこで描かれている鬼の姿は、

「その出現はやや非現実のかなたのものとなり、（中略）いわば、現実  
に鬼が怖れられ鬼が現れた時代は、すでに遠く過ぎ去っていたのである」<sup>1)</sup>

とされ、中世の能楽や文学で描かれる「鬼」像は悲劇の主人公であったり、滑稽で喜劇的であつて、そこにはデフォルメされたあとを感じることも述べている。その時代には、鬼は人々を恐れさせる力を失いつつあつたのだろうか。

では、鬼は出現の当初から「害なすもの」として捉えられていたか、という点、少し事情が違ふらしい。

上代においては、その姿を現さぬことから生じる畏怖の思いによつて、しばしば「かみ」と同義語に扱われておりそのうちに「幸福をもたらすもの」が「かみ」に、「害をなすもの」を「もの・おに」というようになって

たと言う。

また鬼は、中国の思想の影響も受けている。

かの国で鬼という漢字の持つ意味は「幽霊・魂」であって、「邪気・悪鬼」の意はない。それがわが国にも伝わり、「人の魂」をも指すようになった。いった。

しかし、その意で用いられることはあまりなかったようである。仏教の伝来によってもたらされた「神と対立する魔・悪鬼」の意が加わり、その伝播とともに鬼＝悪鬼説の定着が急速になされていったのだろう。

このことから、早期の日本文学に現れる鬼とは、前記の意に加え、異形のもの。形を成さぬもの。辺境の地に住むもの（蝦夷・隼人・熊襲など）。死の国へと導くもの。でもあったのだ。

しかし、畏怖の念を起こさせる非現実の世界に生きていた鬼の存在を、そのものへの恐れを失わぬまま、より身近に感じる時代が訪れる。それが平安王朝時代である。

### 三 中古時代の鬼

この時代に有職故実として定着した、我々にも馴染み深い儀式がある。それが「追儺（つひな）」別名「おにやらい」である。

大晦日の夜に陰陽師や、方相氏（ほうそうし）という役を担う大舎人が（玄衣朱裳・黄金四つ目の仮面をかぶり大声で練り歩く）、宮中の物の怪や鬼を払うというもので、後に、異形の様相をしている方相氏を鬼に見立てて追い回す趣向が生まれ、これが現在の節分の慣習につながっているという。

重要なのは「おにやらい」が宮中の一大行事として扱われていたという点である。時の権力者が鬼に対して敏感だったということか。

この頃の文学に登場する鬼にはある特徴がある。それを代表する例が『伊勢物語』第六段・芥川である。

ある男（業平といわれている）が、思いを寄せている女を盗み出した。芥川を渡ってさらに行くうちに夜も更け、雨も降り、雷まで鳴り出した。そこで、男は途中にあつた蔵に女を入れ、夜通し外を見張る任についた。夜更けに女は蔵のなかで鬼に襲われる。叫び声をあげたが、雷雨の中にいる男にはそれが聞こえなかった。

朝、蔵を開けてみると、すでに女は鬼に食われたあとで、跡形もなかった。

という話である。が、話はここで終わらない。このあと、鬼の正体が明かされている。

「これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひいでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、（中略）とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。」

つまり、女の兄たちが女を連れ戻しに來、奪い返された男はそれを鬼とよんだのである。

鬼は、人であつた。だが、この人、ただの人ではなかった。彼らは藤原冬嗣を祖父に持つ、れっきとした公達で、事件当時はまだそれほど身分は高くなかつたものの将来を約束された権力者であつた。

ここでいう鬼とは有無を言わず力を押し通す「権力」という物の怪だと言えるのではないか。そこには、これから始まる藤原氏の時代を予感させる圧倒的な強さが垣間見られる。

事実、藤原氏の人々はよく鬼に遭遇した記録が残っており、彼らの全盛期ほど、鬼の出現の多かった時代はないといえるかもしれない。あちこちで鬼が出没し、時には人が襲われ、羅城門や朱雀門の楼閣には鬼が住むといわれ、昼間でも人が寄り付かなくなっていたという。

馬場氏は、「これらの鬼の正体の一部は、権門・藤原氏に排斥されたものたちや、藤原専制政治の生み出す社会不安がもたらした悪質な犯罪である」と述べた上でなお、それでも鬼は「目に見えぬ恐ろしいもの」として恐れられていたと主張する。

そんななか、ここに一つの変化が現れ始める。それが「生成（なまなり）」である。これは新たな鬼の出現の形であった。

#### 四 人の心と鬼

夢枕獏著『陰陽師』の中に、生きながらにして鬼になる女の話がある。恋しいあまり嫉妬に狂い「生成」になる憐れな女だ。平安王朝時代には、鬼が跋扈するに留まらず、人が鬼になるようにまでなったのだ。どのような人がどのような理由で鬼になったのか。それらを読み解くべく、資料を見ていこう。

#### ① 宇治の橋姫伝説

屋代本『平家物語』剣の巻に伝えられている話。嵯峨朝の頃、ある公卿の姫で嫉妬深いものがあつた。嫉ましい女を殺すべく、鬼になりたい旨を貴船大明神に参籠し願をかける。神は、姿を作り変えて宇治川に二十一日間漬かるよう進言する。

姫は髪を固めて角を作り、頭に鉄輪をいた<sup>3</sup>だき、松明を口にくわえて、宇治川に二十一日間漬かり、果たして鬼となった。そうして自分を蔑んだものごとく、とり殺せたのである。

ここでの「神」が、神らしからぬことや、二十一日間も宇治川に漬かっていたことが事実ならば、その時点で姫は絶命しているのではないか。といった疑問はあるが、次の例も見てみよう。

#### ② 葛城上人の話

『今昔物語』二十巻では、修行僧が生きながらにして鬼になったと語られている。

この上人、大変、験あらたかな僧であつたが祈祷を受けに来た染殿の後を、偶然に垣間見たことから心乱れ、なんとしても彼女を得たいと思うようになった。

ところが、自らが、女色を断つ身であるのに加えて、恋焦がれる相手は後に清和天皇の母になる明子（冬嗣の孫・良房の娘）。上人は、この実現不可能の願望を、自らが鬼になることで果たしてしまうのである。このとき鬼になるべく、上人のとった手段は十日間の断食である。そしてその死後すぐに彼は鬼になっている。

これら二つの話には共通点がある。一つは鬼になったものの立場が、抑圧されているものであるということだ。

外に出ることも、そして、己の感情をストレートに表現することすら憚れる平安貴族の女性と、俗世との交わりを絶ち、煩惱を日々振り払わねばならぬ法師。生き苦しいその立場はとても似通っている。

二つ目は、二人が妄執の持ち主であるということ。

尋常ではない嫉妬や執念など、負の想念の強さが、川に漬かったり断食するといったエネルギーの原動力になっている。

そうして三つ目にして、最大のポイントは、二人が鬼になったのは、自らそうなることを強く望んだ結果だということだ。そのものの心が鬼に変わることで、本当に鬼になってしまったということになる。

『源氏物語』の作者、紫式部が、『紫式部集』のなかにこのような歌を残している。

亡き人にかごとをかけて煩ふも己が心の鬼にやはあらむ

かへし

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ

この歌は鬼になってしまった女の様子を描いた屏風を見て詠んだ歌とされている。

同じく紫式部の著『源氏物語』にも「心の鬼」に苦しめられ、「生霊」になり、死してもなお「死霊」という鬼として作品のなかに生き続けた

人物が登場する。彼女、六条御息所の造型には、紫式部の持つ「心の鬼」観が窺い知れるようでない。それを少し探してみたい。

### ③六条御息所と「もの・おに」

六条御息所はいわずと知れた、光源氏を取り巻く魅力的な女性のうちの一人で、身分も高く教養も豊かな、美しい、プライドの高い大人の女性である。

彼女は普段から年下の源氏との関係に思い悩んでいた。年若な公達との交際が世間の好奇の目に晒されることをことさらに嫌がるほど誇り高い女性だった。

そんな彼女が、源氏が心惹かれた女性をとり殺す「鬼」となってしまう。愛しさゆえに、そのプライドの高さゆえに。印象的なのは、やはり源氏の正妻・葵の上を夢の中でとり殺したあとの場面である。

「あやしう、我にもあらぬ御心地を思いつづくるに、御衣などもただ芥子の香にしみかへりたる、あやしさに、御ゆる参り、御衣着替へなどしたまひて試みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだにうとましよう思さるるに、まして人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひとつに思し嘆くに、いとど御心変りもまさりゆく」

（『新編日本古典文学全集』より）

と、①②で鬼になったものたちが抱いていない感情を持っている。人をとり殺してなお、人目を気にし、己の良心との格闘をつづけている。

橋本真理子氏は、「葵の上についての物の怪は、源氏、御息所、そして当の葵の上までが持つ「心の鬼」である「良心の呵責」が見せる幻想で

ある。」と述べているが、それだけでは無いように思われる。

また、田中貴子氏は心の鬼の正体を「人間のよこしまな心のありようを形象化したもので、それを身体の中かに認識する行為が心の中に鬼を作り上げた」<sup>(5)</sup>

と述べている。

確かに御息所は「鬼」になった。それは彼女の心の、鬼の部分が望んだ結果であつたといえるだろう。しかし、彼女はそれのことによってさらに苦しめられ、このことがきっかけで、このあと、娘を伴って伊勢へ下向し、源氏の前から姿を消している。

もちろん、死してなお、このあと物語のなかで様々な人にとり憑いたり、不幸の元となる怨霊として登場してはいるが、それでもなお、彼女の潜在意識のなかにははつきりと「鬼とならざるをえなかった」悲しみが見て取れるのだ。

## 五 鬼の正体・そしてそのゆくえ

結局、鬼の正体とはなんなのだろうか。有無を言わさぬ強烈な権力か。人々を震撼させた犯罪者たちの行為・それから来る恐怖による人々の抱いた幻想か。それとも、人の心のなかにある「負」の想念、またはそれが実体化した結果であるのか。

様々な推測が浮かんでは消える中で、私のたどり着いたひとつの確信がここにある。

鬼とは、人であり、人の心に反応し、あるときは生まれ、あるときは入り込んでくる、負の想念、そして己の心の弱さである。

「己心の魔」という言葉がある。私は、これこそが最も鬼の正体に近

いものではないかと思う。鬼を生むのも自分の心であれば、鬼を呼び込むのも自分の心である、と。

「人は、心ひとつで鬼にも仏にもなる」という言葉は、まさにこのことを指しているのではないだろうか。

馬場氏は「近世にいたつて鬼は滅んだ」と述べる。

「過酷な封建主義体制のなかで、鬼は放逐される運命を負うことによつてのみ農耕行事の祭りのなかに生き、誅殺されることによつてのみ舞台芸術の世界に存在が許された」と。<sup>(6)</sup>

そうして、現代に「息絶え絶えに」あえいでいる鬼の姿を嘆いている。

しかし、私はそうは思わない。鬼は確実に、現代にも胤を残しており、しかもその力は着実に蓄えられつつあり、今にも実体化してくるような気配すら感じる。そう。彼らは「我々に見えなくなっただけ」なのではないだろうか。

見えなくなったということは何より恐ろしいことだ。

最も鬼が跋扈した平安時代、人々は見えないながらも鬼の存在を確実に知っていた。と同時に、自らが鬼になる可能性を秘めていることも理解していたし、そうなることを恐れ、可能か不可能かは別として鬼から己の身を守る術も、知っていたのだ。現代を生きる我々は今、自らの心が鬼であるか否かの判断すらできないのではないか。

鬼の正体が、人Ⅱ己心の魔であるならば、人が在る限り鬼が消えて無くなることはない。鬼の誕生から幾千年経つが、どのように時代の様相が変わろうとも、人の心の本質がそう変わることはない。

新しく、便利なものが発明されれば、人はそれを用いて、あるいはそれを求めて争いを起こす。今、この瞬間にも世界のどこかで争いが起

こっている。それを鬼の仕業と言わずして、何というのか。そうして、それを鬼の仕業と認識せず、「仕方ないこと」として片付けてしまっていることに、我々の心に働きかける、現代の鬼の、「あやしの力」を感じてならない。

そう。鬼は我々の近くに居るのだ。鬼は、どこへ行こうとしているのか。それも、人の心次第と言えよう。

#### 注

- (1) 馬場あき子 『鬼の研究』 筑摩書房 一九八八
- (2) 折口信夫 『怪異の民俗学④ 鬼』 「春来る鬼」 より 河出書房新社 二〇〇〇
- (3) 同注 (1)
- (4) 橋本真理子 「源氏物語における物の怪考―物語方法―」 一九八六
- (5) 田中貴子 「心の鬼が見えるまで」 新曜社 一九九四 志村有弘 『羅城門の怪 異界往来伝奇書譚』 角川書店 二〇〇四
- (6) 同注 (1)

#### 参考文献

- ベルナル・フランク著 『風流の鬼―平安の光と闇』 仏蘭久淳子訳 平凡社 一九九八
- 片桐洋一 他校注 『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語』 小学館 一九九四
- 阿部秋生 他校注 『日本古典文学全集13 源氏物語二』 小学館 一九七二
- 馬淵和夫 他校注 『新編日本古典文学全集37 今昔物語集③』 小学館 二〇〇一
- 鈴木敬三編 『有職故実大辞典』 吉川弘文館 一九九五
- 阿部猛 他編 『平安時代儀式年中行事事典』 東京堂出版 二〇〇三